

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2020.6.30

VOL.

151



小竹貝塚出土品（富山市呉羽）

《骨角製筭》

小竹貝塚から出土した縄文時代の筭こうがいです。「筭」とは、かんざしやヘアピンのようなものです。動物の骨や角を様々な形に加工しています。

この筭ですが、ただの細長い棒ではなく、飾りや筋目が付けられています。このことから、縄文人もおしゃれに関心があったという、当時の人の気持ちまで出土遺物から読み解くことができます。

とっておき埋文講座 ● 企画展「古代へのとびら 2020」

● 標式土器を語る「天神山式土器」

埋文あらかると ● とやまの古墳時代集落遺跡等出土品

Center Flash ● わくわく古代チャレンジ 2020

● 人のうごき

古写真発掘！ ● 串田新遺跡（国指定史跡） 射水市串田新

富山県埋蔵文化財センター

企画展「古代へのとびら2020」

とっておき埋文講座① ー富山県の旧石器時代から近代までの歴史を発掘出土品から学ぶー

はじめに

当センターの春の企画展「古代へのとびら2020ー富山県の旧石器時代から近代までの歴史を発掘出土品から学ぶー」では、初めて歴史を学ぶ子供たちが楽しく学べる展示をコンセプトとしています。

今年度は解説パネルに各時代を知る上で大切なキーワードを明示しています。例えば、弥生時代のキーワードには「稲作」があります。稲作に関する農耕具などを展示することで、その時代の様子がイメージできるようになっています。

また、今年度の特設コーナーは「コレナニ!? 遺物コーナー」です。当センターが所蔵する数多くの遺物の中から、一見「これは何!?!」と思うものや、遺物の正体や解説を知って「なるほど!」「本当に!?!」と納得や驚きのあるものを7点厳選して展示しています。投票コーナーを設けましたので、驚きや面白さなどを感じていただけたら、遺物に認定してくださいね。

他にも今年度の新たな取組として、歴史をより詳しく学ぶための時代解説シートも用意しました。富山県の史跡やちょっとマニアな展示品についてさらに深く学びたい人におすすめです。



旧石器時代

ウワダイラ^あ遺跡(南砺市)と直坂^{すくさか}遺跡(富山市)、立美遺跡(南砺市)から出土した石器の中から、富山県指



定文化財(考古資料)に指定されているものをピックアップしました。石器の形や美しさからもその価値が十分に伝わってきます。

縄文時代

縄文時代は約13,000年続き、時期も草創期から晩期まで6期に分かれます。今回は草創期を除いた早期から晩期までの5期の土器を展示しています。また、深鉢や浅鉢など、様々な形や大きさのものを選びました。各時期を通しての形や文様の変化、多彩さを感じることができます。もちろん、土器だけでなく石斧や石皿などの石製品、祭祀で使用された土偶など、縄文人の生活をイメージできるものも展示しています。



弥生時代

大陸から稲作農耕の技術が伝わり、米作りが始まった時代ということで、





稲作に関する出土品を中心にピックアップしました。おなじみの弥生土器や石包丁はもちろん、当時のお米（炭化米）も展示しています。

古墳時代

古墳時代のキーワードといえば、まず「古墳」。王や豪族の富と権力の象徴である鉄剣や銅鏡、玉類など、古墳の副葬品を中心に選びました。

他にも、渡来人によって技術が伝えられた須恵器や弥生土器の流れを組む土師器もこの時代を象徴する遺物として欠かせません。



古代

仏教が伝来し広まった時代であることが分かる出土品として、瓦塔や印仏を取り上げました。瓦塔は寺院の「塔」がモデルとなっています。印仏は座仏を陰刻したもので、背面につまみがついていることから、スタンプのように使われたと考えられます。



また、文字資料が増えるのもこの時代の特徴です。木簡や硯、墨書土器などをそろえてみました。



中世

武士が身につけていた兜や刀の鏢などの武具、鉄砲の部品である火銃や鉛玉をピックアップしました。また、喫茶の習慣が始まったのもこの時代の特色の一つ。天目茶碗や茶壺など茶道具も展示しています。



近世

江戸幕府が開かれてからは政治が安定し、産業や交通の発達、経済の発展をもたらしました。各地でも様々な特産品や地場産業が生まれ、各地との交易もさかんになりました。

そのことを物語る一例として、富山の越中瀬戸焼や佐賀の唐津焼や伊万里焼など様々な焼き物をピックアップしました。富山県も他地域との交易がさかんであったことがうかがえます。



立山信仰

令和2年3月16日付で国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」に



160点の資料が新たに追加指定されました。今回の展示からも富山県民の立山信仰へのかかわりの深さが分かります。立山曼荼羅は吉祥坊本(レプリカ)を展示しています。佐伯有頼が熊を追うところから、地獄や極楽など立山開山の物語が色彩豊かに、立山信仰の世界観がとてもよく伝わってきます。

近代

旧県会議事堂跡の瓦や、薬瓶、麦酒瓶、戦中の訓練時に使用された実砲などを展示しています。これらの展示品は長い歴史の中では最近のものですが、未来へ伝える大切な文化財です。



おわりに

今年度も小・中学生が教科書等でよく目にする定番の出土品から歴史に詳しい人も興味を引く出土品まで、バラエティに富んだ内容となっています。

来館された方に富山県にある数多くの遺跡や貴重な出土品の魅力を感じていただくとともに、歴史や考古学により一層興味関心をもっていただけるような展示にしました。ぜひ当センターへお越しください。ご来館をお待ちしています。

(小嶋 剛)

標式土器を語る「天神山式土器」

とっておき埋文講座②

富山考古学会 副会長 久々 忠義



天神山式土器

時期と地域差の目印

パソコンで「ひょうしき」という文字を入力すると、標識という漢字が出ます。標式という語は一般的な辞書にはなく、考古学の世界の用語です。交通標識は速度制限や進入禁止などの目印ですが、標式土器は時期と分布地域の違いを示す目印です。標はしるしのこと、式は一定のきまりを意味するので、標式土器は、形や文様（しるし）が、一定のきまりに基づいて作られている土器ということになります。

縄文時代は、約1万3千年間の長期にわたりますが、その間は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期に大別され、各期は、いくつかの土器型式によって細別され、それが地域ごとに並べられた全国縄文土器編年表ができています。天神山式土器は、富山県の縄文時代中期中葉の目印となるものです。図1は、北陸の縄文時代研究に取り組んだ小島俊彰先生が作成したものです（氷見市史資料編5）。小島先生は、昨年10月に亡くなりました。多くの論文を残されましたが、今日はその研究の一端を紹介することになります。この編年表には、上山田・天神山と記載されています。上山田は、石川県かほく市にある上山田貝塚のことで、石川県では上山田式と呼ばれています。その下に、朝日A上層とあります。大正7年に朝日貝塚A地点で発掘されたバスケット型土器と呼ばれる土器があります。これが当時の標式土器でした。昭和30年代までは、天神山式ではなく朝日A上層式あるいは北代式と呼ばれていました。

大別	細別	富山・石川	(東北)関東
中期	前葉	新保 新崎	五領ヶ台
	中葉	上山田・天神山 (朝日A上層)	勝坂
	後葉	古府	加曾利E I
		串田新 I 串田新 II	加曾利E II 加曾利E III 加曾利E IV

図1 縄文中期の土器型式

天神山遺跡—最初の遺跡—

天神山式土器は、魚津市天神山遺跡から出土した縄文土器をもとに名付けられたものです。

天神山遺跡は、魚津市小川寺字天神山に所在します。標高95mの舌状台地上に立地し、東は布施川の支流小川寺川に面し、西に標高163mの天神山があります。その山上は戦国時代の山城で、弥生時代の高地性集落としても注目されています。縄文集落がこの山の麓に立地することは、山が縄文人の交通の目印となっていたためかもしれません（図2）。

この遺跡は、明治20年（1887）頃、魚津の人阿波加修造と吉澤庄作が、石器時代の遺跡であることを唱え世に知られるようになりました。明治41年、吉澤は早川荘作を連れて坪井正五郎（日本初の人類学者）を遺跡へ案内しました。早川はこののち「富山考古学の草分け」と呼ばれるようになります。ですから、天神山遺跡は、富山県最初の遺跡であり、富山考古学研究の始まりの遺跡といえます。

縄文土器は、明治12年（1879）に大森貝塚の報告書に記載されたコードマークドボタリーの訳語ですが、縄文時代の語が使われるようになったのは、昭和34年頃からのようです。

天神山遺跡は、昭和30年（1955）と33年（1958）に発掘調査が行われました。その結果、縄文土器の特徴が明らかになり、それから天神山式土器の呼称が使われるようになります。



図2 天神山遺跡 東から 奥が天神山

天神山式土器の諸段階

昭和49年（1974）、小島先生は、天神山式土器を2段階に分ける説を発表しました。昭和59年に朝日町境A遺跡の発掘調査が行われ、天神山式土器が数多く出土しました。それらは、平成10年に重要文化財に指定されています。私は、境A遺跡の天神山式土器を3期に区分しています。

天神山式土器の文様は、斜行した渦巻基隆帯を配し、その周囲を半截竹管文による半隆起線文で埋めるもので、基隆帯上には爪形文や刻目文が刻まれています。小島先生は、基隆帯上が爪形文で、半隆起線文間に三叉文を刻むものを第1段階、基隆帯上が刻目文になり、半隆起線文間に三叉文が少ないものを第2段階としました。

筆者は、口縁部断面と胴部下半の文様帯に注目して、以下のように3期に区分しています。（図3）

第1期（小島第1段階）

口縁部断面の形状が、口唇部が内面に傾くもの。この前の段階にあたる新崎式では口唇部が水平です。また、胴部は、基隆帯が胴部下半部に伸び、下半部の文様帯が分離していません。

第2期（小島第2段階）

口縁部断面の形状は、口唇部の幅が広くなり傾きが強くなります。胴部は、半隆起線文が垂下する下半部文様帯が生まれます。

第3期

口縁部断面の形状は、口唇部の幅がさらに広く、傾きも強くなります。胴部上半部の基隆帯は、S字状に短小化します。下半部の半隆起線文は、第2期では、区画を作っていますが、ただ垂下するだけの条線となります。次の段階の古府式では、口縁部内面の稜線が失われます。基隆帯が隆帯ではなく、半隆起線文となるものもあります。

天神山式は、古府式（牛滑式）と合わせて天神山様式と呼んで一括される

ことがあります。形や文様の基本的要素は同じですが、少しずつ崩れていくように変化します。その変化は、手抜き方向性と呼ばれていたと記憶しています。土器の製作を親が子へ伝える際、形や文様のきまりが十分に子に伝わらず、細部が省略されていくということなのかもしれません。

国立歴史民俗博物館の研究チームによる年代測定結果を参考にすると、天神山式土器が使われた年代は、今から5,000～4,810年前の約190年間ということになります。そのような長い期間であったとすれば、その変化は、親も子も気づかないうちのできごとであったかもしれません。

特色ある土器の把手(突起)

天神山式土器は、石川県東部から新潟県西部に分布しています。新潟県の信濃川流域には火炎土器と呼ばれる土器が分布し、長野県・関東には、勝坂式、曾利式、加曾利E式、東北には大木式と呼ばれる土器が分布しています。

火炎土器には、鶏頭冠突起と呼ばれる鶏のトサカのような突起(把手)がつくものがあります。小島先生は、それを地域の紋章のような意味があるのではと考えました。そして、天神山式



図4 Mitsuyama装飾環状把手(上:朝日町教育委員会提供)と動物形把手(下)

土器のMitsuyama装飾環状把手がそれではないかと思いつきました(図4上)。紋章には、その集団のなりたちに関わる物語が込められているともいわれます。突起(把手)は、そのような地域集団の自己主張なのでしょう。

Mitsuyama装飾環状把手は、円環上にW状の小さな突起が付くものです。円環やW突起は何を意味しているのでしょうか。黒部市愛本新遺跡では、天神山式に先立つ新崎式土器に、動物を思わせる突起が付いています(図4下)。目や鼻を刺突で、手足は三本紐、長いシッポがあり、私はクマネズミではないかと思っています。Mitsuyama装飾環状把手は、動物が変化して抽象化したものかもしれません。

天神山式土器の時代

天神山遺跡から出土する石器には、石鏃、石錘、凹石があり、穏やかな自然環境の中で狩り、川漁、木の実の採集などをしてきた縄文人の暮らしが想像されてきました。ところが、近年、朝日町不動堂遺跡から出土した縄文土器にダイズの圧痕があることがわかりました。ダイズの栽培も行われていたようです。

天神山式土器の中心的な分布地域は、富山県と新潟県の県境付近です。この地域は、縄文人が宝石としたヒスイの産地です。ヒスイは、糸魚川市の姫川上流から流れ出し、境A遺跡が面する宮崎海岸にたくさん漂着したようです。当時は、川の水量も多く、海流も渦巻くような状況だったのかもしれません。

天神山式土器の渦巻文様については、長野県の土器に蛇や蛙などを思わせる文様があるので、蛇が想起されます。しかし、その分布地域がヒスイの産地と重なることを考えると、川や海の水の流れを表しているようにも思えてきます。(令和2年1月19日 第5回 県民考古学講座)

※タイトル写真と図2の写真は魚津市教育委員会提供

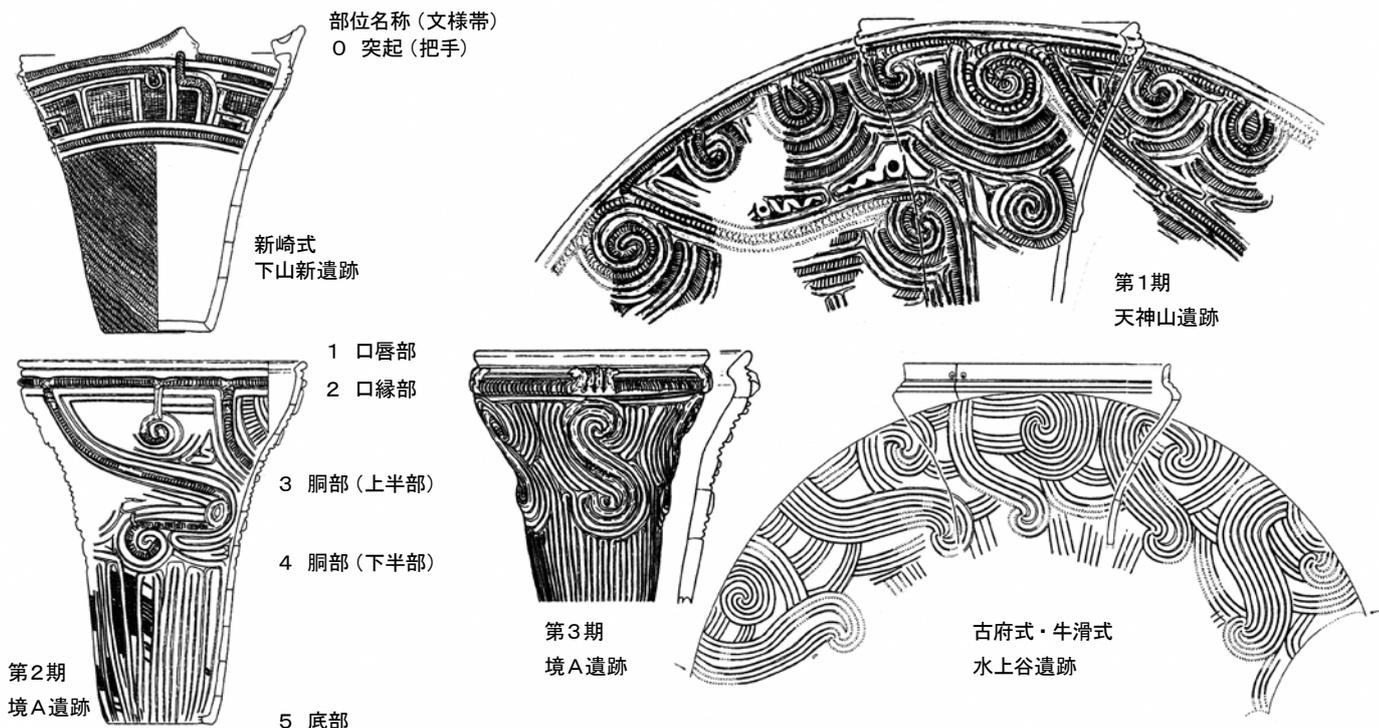


図3 天神山式土器の諸段階

埋文 あらがると

刊行! 富山県出土の重要考古資料第12集 とやまの古墳時代集落遺跡等出土品

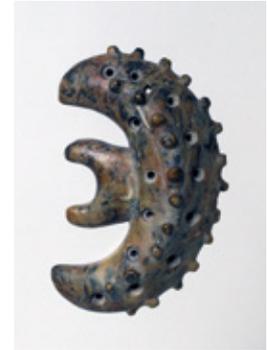
当センターは、平成19年度から、富山県の代表的な遺跡の出土品を紹介する冊子として「富山県出土の重要考古資料」を11冊刊行してきました。今回は第12集として、古墳時代の集落遺跡等の出土品を紹介します。

現在、富山県内において、古墳時代の集落遺跡は約60遺跡が発掘調査等で確認されています。このうち、土器編年の基準資料や、文化・風習を表す祭祀具や特殊品等に焦点を当てて、より重要度の高い7遺跡の出土品を選定しました。

古墳時代は、中国や朝鮮などの先進的な渡来文化を積極的に吸収しながら、新たな律令国家へ再編成が進められた時代で、富山県でもこうした中央政府の政策が反映された出土品がみられます。本書により富山県の貴重な文化財に触れていただき、関心を深めていただければ幸いです。



中山中遺跡出土品



若宮B遺跡出土
子持玉



南太閤山I遺跡出土品



上久津呂中屋遺跡
出土 角杯



中谷内遺跡出土品

「わくわく古代チャレンジ2020」開催!

埋文センターでは、考古学に触れられるプログラムをたくさん用意しています。埋文センターを訪れてみませんか。

① ふるさと考古学教室 7月18日(土)～9月6日(日)

親子で楽しみながら古代のものづくりにチャレンジします。

対象：小学校4～6年生の親子

<メニュー>

- ・刀鍛冶を体験しよう…………… 7月18日(土)、19日(日)、
23日(木)、24日(金)
- ・古代の鏡の鑄造を体験しよう… 7月25日(土)、26日(日)、
8月1日(土)、2日(日)
- ・染物を体験しよう…………… 8月8日(土)、9日(日)、10日(月)
- ・ガラスの装飾品を作ろう…………… 8月22日(土)、23日(日)、
29日(土)、30日(日)
- ・大型まが玉づくりを体験しよう… 9月5日(土)、6日(日)

※事前の申込みが必要です。



② こども考古学クラブ 10月4日(日)、11日(日)、18日(日)

目指せ未来の考古学者!

対象：3日間全てに参加できる小学校6年生の児童

<内容(予定)>

- ・旧石器時代から近世までの学習
- ・土器の実測体験、拓本体験、復元体験

※事前の申込みが必要です。



③ まいぶん研究室 7月18日(土)～8月27日(木)

- ・パネル展示
- ・校下の遺跡を知る
- ・動画コーナー ほか

※申込み不要

人のうごき 4月1日付での異動をお知らせします。

■異動 所長 河西 健二
所長代理 岡本 淳一郎
上席専門員 安念 幹倫

■転出 係長 社会教育主事
■転入 副主幹 社会教育主事

林島 崇 富山県立八尾高等学校へ
米田 大介 富山市立藤ノ木小学校へ
篠崎 義博 総合県税事務所魚津相談室から
松嶋 隆徳 黒部市立石田小学校から

古写真発掘!—《5》



串田新遺跡（国指定史跡）

昭和47年（1972年）調査 射水市串田新

串田新遺跡は、旧大門町の独立丘陵上にあります。古くは、昭和24年から26年にかけて当時の県立小杉高等学校地歴班の生徒が発掘調査をしており、この調査の際に出土した土器と同じような特徴を持つ縄文土器を遺跡の名前をとって「串田新式土器」と呼ぶようになりました。そして、串田新遺跡は、全国にも知られる有名な遺跡となりました。

県の発掘調査は、この地で土取りが計画されたことをきっかけに実施されました。串田新遺跡は、縄文時代の遺跡として有名ですが、古墳や古墳時代の住居跡も見つかっています。

発掘前は、畑や果樹園として利用されていたので、写真からは、その間を縫うようにして調査をしていた様子が分かります。

上のカラーの写真は1号墳と呼ばれる古墳の調査の様子です。下の写真は、畑の中をトレンチと呼ばれる細長く設定した調査区の範囲を調査している様子です。よく見ると奥に富山平野が見え、この遺跡が丘陵上にあることが分かります。

この後、串田新遺跡は重要な遺跡として昭和51年（1976年）に国の史跡に指定され、史跡公園として整備されました。

編集後記

本格的な夏を前に、呉羽丘陵の木々の葉は色濃くなり、当センター周辺は鮮やかな緑に囲まれています。さて、当センターでは、企画展や常設展のほか、この夏「わくわく古代チャレンジ2020」等の催しも開催されます。ご来館をお待ちしています。

（担当 松嶋）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.151

令和2年6月30日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/maibun/>

